

7月19日「復活の希望」使徒言行録24：10～21

パウロがイエス様の兄弟ヤコブに会うためにエルサレムへと訪れたときのこと。神殿の境内にいたパウロは、かつて所属し、仲間であった、厳格なユダヤ教のグループ「ファリサイ派」の人達に見つかってしまいます。彼らは、ナザレのイエス派に寝返った裏切り者のパウロを殺してやろうと狙っていたのです。人々を扇動して、暴動を起こし、パウロを殺そうとしましたが、騒動を聞きつけたローマ兵たちがやってきて、パウロは捕らえられ、牢に繋がれてしまいました。普通だったら、そのままイエス様と同じように不当な裁判にかけられて殺されているはずでした。ところが、パウロはローマの市民権を持っていたのです。ローマ帝国は当時の支配者です。その市民ともなれば、属州の者たちが簡単に裁くことは出来ません。ローマ市民はローマから派遣された役人によって適切な裁判を受け、弁明の機会が与えられ、ローマの法律によって裁かれることになっていたのです。あまり良い例えではありませんが、アメリカ兵が日本で犯罪を犯しても、必ずしも日本の法律で裁かれるわけではないことと似ています。

そこで、パウロはローマ総督フェリクスの前に引き出され、裁判を受けることになりました。それが今日の物語です。ユダヤ人たちはパウロのことを訴えます。「実は、この男は疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしている者、『ナザレ人の分派』の主謀者であります。この男は神殿さえも汚そうとしましたので逮捕いたしました。」パウロのことをユダヤのあちこちで騒動を起こしている不穏分子だと言うのです。しかし、パウロは、身の潔白を訴えます。「確かめていただければ分かることですが、私が礼拝のためエルサレムに上ってから、まだ十二日しかたっていない。神殿でも会堂でも町の中でも、この私がだれかと論争したり、群衆を扇動したりするのを、だれも見た者はおりません。そして彼らは、私を告発している件に関し、閣下に対して何の証拠も挙げる事ができません。」確かに、彼らは証拠を持っていませんでした。普通だったらここで不起訴確定でさっさと釈放されています。ところが、ここから様相が変わっていきます。「しかしここで、はっきり申し上げます。私は、彼らが『分派』と呼んでいるこの道に従って、先祖の神を礼拝し、また、律法に則し

たことと預言者の書に書いてあることを、ことごとく信じています。更に、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。」パウロは自分にとって相当不利なことを証言し始めたのです。ファリサイ派が言うように、ローマ帝国によって十字架刑に処されたナザレのイエスを信じていること。そしてその教えを広めていること。裁判の場でそんなことを聞いてしまえば総督も黙ってパウロを釈放するわけにはいきません。結局パウロはローマの高等裁判所に送られることになりました。けれども、パウロはむしろ喜んだのです。たとえローマで処刑されることになっても、皇帝や指導者たちの前で堂々とイエス様のことを宣べ伝える機会が与えられるんだと・・・

パウロは自分の身にどれほど危険が及ぼうともイエス様について語る機会があれば恐れず語りました。それはイエスの語られた言葉を思い出させます。「マタイ 10：17～19 人々を警戒しなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれるからである。また、わたしのために総督や王の前に引き出されて、彼らや異邦人に証しをすることになる。」たとえ強大な権力や武力を前にして一步も引くことなく自らの信じる道を語ったのです。

先日、香港に帰国した宣教師の友人がこんな聖書の言葉を SNS にアップしてハッとさせられました「人の心にはたくさんの企て。主の計らいだけが実現する。（箴言 19：21）」最近、中国において「国家安全法案」が可決されたことは大きなニュースになりました。戦中日本の治安維持法のようなもので、この法案によって中国政府に反対するような言論などを厳しく取り締まることができるようになり、イギリスの植民地として香港に与えられていた自治と独立が奪われることになるからです。香港のキリスト教会も自由で民主的な社会の実現のために過去に声を上げ続けてきた実績がありますので、今、相当な圧力をかけられているそうです。国家の権力や圧力にも屈することなく神の御言葉に従うことを選び取ろうとするキリスト者たちが隣の国に大勢いることを今日の聖書を読みながら改めて思いました。

さて、少し話が変わりますが、最近、SNSでキリスト教関連のこんなツイートを見かけました。「クリスチャンになったら復活して永遠の命に与れるって教会では教えるけど、永遠ほど長い期間、生きていたいとは思わないなあ・・・」皆さんはどう思われるでしょうか？私はちょっと違和感を持ったのです。私たちが復活させられるというのは長生きがただらと続くようなそんな単純なものではありません。文字通り劇的に命が回復されるような出来事です。私たちが受け継ぐとされている永遠の命はそんな「軽いモノ」ではないはずだと思うのです。

この4月から丸亀少女の家で教誨師として働いています。行って驚きました。子どもたちがあまりに真剣に私の話に耳を傾けてくれるからです。今まで色々なところで話をしてきましたが（大学、中高、保育園、職員会、YMCA、そして教会）こんなに真剣に聞いてもらったのは初めてかもしれません。それは彼女たちが本当に復活を希望しているからではないだろうかと思っています。どんな話をするのかというと、基本的には彼女たちの質問に答える形式にしています。最初「信頼できる友人が一人でもいると良い」という話をしました。すると「信頼の意味が分からない」と質問があったので「信頼とは互いに誠実であること」という話をしました。すると、「信頼しても今まで良いことは一度も無かった」という答えが返ってきましたので、今度は「信頼とは赦しあい、受け入れあうことだ」という話をしました。次回は「人格」の話をするつもりです。

彼女たちと関わっていると、あまりに褒められ慣れしていないことに驚きます。少しでも「その意見は良いね」とか「前回～な質問してくれたよな？覚えてるよ」というと本当にうれしそうにするのです。きっと褒められたり、真剣に関わってもらったり、愛されたり、信頼できる大人との関わりが極端に少ないのだらうと思います。施設長さんの言葉です。「彼女達は加害者ですが、被害者でもあります。彼女達の後ろには必ず悪い大人か、男の影が付きまとうのです」そうやって傷ついた彼女達が、自分自身を回復しようと必死になっている現場に居合わせてもらっていることに本当に感謝しています。

復活とはそういうことではないでしょうか？傷つき、自暴自棄になり、

自分を愛せない状態、ある意味で「死んで」いた魂が、愛に触れ、回復していくことです。奴隷状態のユダヤ人たちがエジプトを脱出させられたように、金への欲にまみれていたザアカイが人間らしさを取り戻すように・・・イエスの周りには多くの罪人もいたと聖書に書かれています。私はこれまでこの「罪人」とは、当時の罪人（徴税人や娼婦など、重い皮膚病の人など）で現代では「罪人」には該当しない人も多数いたと思っていました。けれども教誨師として彼女達と触れ合うことによって現代に当てはめても「罪人」と呼ばれる人達も大勢いたのだらうと思うようになりました。彼らはイエスに出会うことで本当に復活させられたのです。

パウロは力強く語ります。「**正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。**」これは決して、寿命がダラダラと延びるなんていう類のちっぽけな希望ではありません。自分を愛せなかった人が自信を取り戻す、信頼を知らなかった人が他者を愛せるようになる。生きる希望を無くしていた人が、生きる意味を見いだす。イエスに出合った人たちはありとあらゆる意味で復活させられていったのです。そしてその復活は私たちも今も受け取っているものです。「**はっきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。**」（ヨハネ 5：25）新しい週も、イエスの復活の希望に生かされて喜びながら歩みたいと願います。